

夫れ真如の体相は深広にして思量を超え、本覚の光輪は赫奕として辺際なし。番々出世の諸仏隠顕縁に随い真応無碍なり。我が師父仏陀禪那弁榮聖者、本地の慧光を包みて此の土に出興し、信仰特に多難なる現代の衆生の為に円具光明の真諦を明し弥陀覺王の元意を開顯し給う。真に聖者の出現無かりせば大悲の本懐知るに由なく無明長夜の中何れの時にか靈光を仰ぎしならん。然りと雖も法は独り弘まらず、伝弘人を得ざれば大法は泯滅せん。今ここに弥陀円具光明の三昧を秘鍵余す所なく人を得て、二祖笹本戒浄上人に師資相承せらる。

上人は明治七年一月十四日、東京浅草の河田米次郎氏三男として呱呱の声を挙げ給う。天資聰明穎悟の聞え高く、八才の時、鎌倉大仏殿の樹下信戒師養子に懇請せられし処、其の夜夢に浄土の宮殿を拝して童心大に動き、遂に発心して得度し給う。十二三才の頃より東都遊学の砌には世俗に超然として求道の志堅く、十六才の時生死輪廻論に心を潜めし窓には仏教唯心の理を基底となすべきを痛感し給う。然れ共、仏教内典の現代的研討科学哲学の研究は其の信仰を根底より動揺せしめ、暗黒の中に懊悩の日を送り給う事十有一年、其の間瑜伽論等聖教の披閱數百回に及び攻学苦修、然も終始一貫着々事実を觀察する態度を以て真実の自己を思量し頭髮脱落する程なりしも遂に時代の悩み唯物無神を克服し、人類の苦惡知無明を超えて永遠不滅の法身大我に覚め給う。道業群を抜き

明治廿一年浄土宗学高等正科（今の大正大学の前々身）修了後は選ばれて内地留学生として金沢第四高校に進み、弊衣弊服構う所なく簡素窮乏の中に切磋を累ね、東大に進みては心理学を専攻造詣日に深く、軌近学理を豎とし平素見聞悟得の内証を横として唯識頼耶の仏教心理の玄底を叩き、師弟研磨却つて恩師元良博士に講ずる所あり。大学院に於ては催眠心理学を究明し、禪那三昧の本義を諦め給う。大正三年に至る迄宗教大学天台宗大学に一般特殊の心理学を講じつつ凝思苟くも廢せず、唯識三性の教観、十玄六相の妙旨は研鑽愈々精を尽くして鏡を懸け、慧眼定益々清徹にして深遠なり。

大正三年一月三昧発得の兄弟子宮本契善師の勧めに従い、東京浅草の山口家にて師父聖者に相見し弥陀円具の玄談を聞くや即ち讚じて曰く弁栄聖者は実に現代の釈尊なりと。立地に真如の实地認識に関する博士論文を抛つて光明行禪人となり鞠躬如として生身の仏に對するが如し。名聞利養を顧みず勇猛不退の称念、清旦入定懈る所なく、爾來親しく函丈に侍しては瀉瓶遺す事なく師父聖者の嫡統を紹ぎ、絶対自身の弥陀、三昧の床に現じては豊かに斯教の秘奥を悟り得て憶念見仏の正宗を伝持し給う。大正九年聖者御入滅後は推されて総監の職席を襲い既成宗門圧迫の嵐に對して挺身円具の法城を嚴護し給う。董寺慶運精舍寺務繁忙暇なきに東西に星馳して法座暖なる暇なく、柔軟謙讓の儀表心靈の花馥郁として到る処淨きが如く、清淨如法の行持八面玲瓏として日

光の寶石に映ずるが如く、威曜高朗の中に慈音の提撕光明主義の真髓を説きて止まず。三昧入神の慧一向専修の行業、其の悲智の温容に触るる者欣然永生樂果の直線道に進趣す。宣揚し給う祖承の正義其の光の及ぶ所、打起せられし円具光明主義の鳳雛幾千百、一路第三期的円具教の願行に振り立つ。仮令異端の邪義起りて真偽紛淆金鍮判じ難き事ありとも皆其の紫朱を弁ずる事を得て見仏往生の宗趣毫も謬る事なし。正宗弥々興り法灯益々明かに大衆齊しく帰依して三昧念仏の隆興洋々として都鄙に遍かりしに、何ぞ凶らん、本部主催の三昧会を病軀炎暑の洛北古知谷に指導し、弥陀直流の光明主義中心道を懇に後昆に遺托し給ひし昭和十二年七月廿六日、化縁既に尽きてか横浜の自坊に帰り給ひし其の夜忽然として遷化し給う。嗚呼、万籟為に寂として声なく唯神奈川の清流不滅の梵音を揚ぐるのみ。

良に惟れば師父聖者首唱の阿弥陀宗の真風を永世に挙揚し万国万代の衆生に如来光明摂化の正意を伝え給う二祖戒浄上人の御生涯は、靈応内に充ち給う非凡の靈徳の現れに在せば、捨身奉行の御聖躅、誰か之を仰がざるものあらんや。師訓の精髓現身証得、誰か之を冀わざるものあらんや。

略年譜と文献案内

笹本戒浄上人略年譜

一八七四(明治 七)年 一歳 一月十四日東京浅草に御誕生、河田米次郎氏三男、幼

名金次郎。

一八七七(明治一〇)年 四歳 御尊父逝去。その頃母上に「死んだらどうなる?」と

たずねられた。

一八八一(明治一四)年 八歳 鎌倉大仏殿の樹下信戒師より養子にと懇請され、その

夜夢に結構な宮殿を拝して、童心大いに動く。

一八八四(明治一七)年 一一歳 樹下信戒師につき得度。翌年、麻布の東洋英和学校に

通学。

一八八八(明治二一)年 一五歳 度牒・改名、僧籍編入。

一八八九(明治二二)年 一六歳 宗学尋常科入学(?)。この頃「生死輪廻論」を書かれた。

一八九一(明治二四)年 一八歳 宗学尋常科卒業。この頃、呉秀三氏著『精神啓微』を

読み信仰を失う。

一八九二(明治二五年)年 一九歳 浄土宗大本山増上寺野上運外師につき宗戒兩脈相承。

一八九四(明治二七年)年 二一歳 浄土宗本校に入學。

一八九八(明治三一年)年 二五歳 浄土宗本校(高等正科)卒業。直ちに郁文館中学第五学年に編入學。

一八九九(明治三二年)年 二六歳 金沢第四高等学校入學。

一九〇二(明治三五年)年 二九歳 第四高等学校卒業。この年、東京帝国大学文科大学入學、元良勇次郎博士につき心理学を専攻。この頃觀心多年、遂に真我を自覺、禅宗流の念仏を始められる。

一九〇四(明治三七年)年 三一歳 横浜、慶運寺住職となられる。

一九〇六(明治三九年)年 三三歳 東京帝国大学文科大学毕业。引き続き大学院に在籍。八月より大正三年三月まで、浄土宗大学で心理学特

別心理学を教授。

一九〇八(明治四一年)年 三五歳 御結婚。この年より大正三年三月まで、芝中学・天台宗中学、天台宗大学高等科にて教鞭を執られる。

一九一〇(明治四三年)年 三七歳 鈴木大拙氏宅で、西田幾多郎氏に催眠術に関してお話あり。

一九一(明治四四)年 三八歳
横浜での浄土宗侶の講習会で「真実の自己」について
講述。

一九一四(大正 三)年 四一歳
弁栄聖者に初めて御対面。爾来、御指導を受けられる。
宗教大学等の教職を辞し、慶運寺寺務に専念される。
この年、弁栄聖者が「光明会趣意書」を頒布され、光
明主義を主唱せられる。

一九一五(大正 四)年 四二歳
知恩院教学高等講習会の講師となり、「覚明」につい
て講述。

一九一六(大正 五)年 四三歳
知恩院教学高等講習会に弁栄聖者を推薦。聖者「宗祖
の皮髓」を講述。

一九一七(大正 六)年 四四歳
知恩院第一五回教学高等講習会で「浄土教不朽の権
威」の題で講述。

一九一九(大正 八)年 四六歳
知恩院第二三回教学高等講習会で「念仏観仏両三昧に
就いて」の題で講述。

一九二〇(大正 九)年 四七歳
一二月四日、弁栄聖者御遷化。その後はすべてをなげ
うち、光明主義のために御尽力なされた。最期まで全

国の別時の指導、講習会等、東奔西走の日々であられた。翌年、推されて光明会総監とられる。

一九三五(昭和一〇)年 六二歳
時代の要請により、全国光明会の統制なるや再度、光明会総監に推さる。

一九三七(昭和一二)年 六四歳
本部主催の古知谷阿弥陀寺での別時終了後、七月二六

日午後九時四五分、御自坊慶運寺にて御遷化。

法号——清蓮社信譽上人善阿随願戒浄大和尚。